

大震災の経験を世界へ

第10回学術フォーラム 発信の方策など議論

日本学術会議土木工学・建築学委員会と、29学舎と同委員会による「東日本大震災の総合対応にう活かすか」をテーマにした学術会議連絡会」は11月29日、東京・六本木

の学術会議講堂で「東日本大震災・阪神淡路大震災等の経験を国際的にどう活かすか」をテーマにした学術会議連絡会」は11月29日、東京・六本木

1月に阪神・淡路大震災が発生し、2005年1月に兵庫県で第2回が開催された。第3回となる15年3月14～18日は仙台市で行い、日本は災害から得た知見や防災への取り組みを国際社会に発信する考え。

を設置。日本は学術会議をはじめとするコンソーシアムを組織して役割を果たす。

冒頭に置いたのが①「われわれの科学および技術に対する盲目的信頼への反省」。災害に関連する活動を行っているわが国の学協会がこれまで災害対策技術を発展させ、実際に被害の低減に貢献してきたが、一方でそれらへの盲目的信頼もあつたと指摘している。災害に対して安全な社会を実現するためには「われわれは常におのれの知識を疑うとともに、自然に対する畏敬の念と謙虚な気持ちを決して忘れてはならない」と記述している。

「国連世界防災会議」、11月の「世界工学会議」に向けて、両大震災をはじめ近年多発する自然災害から得られた知見を踏まえた防災・減災の取り組みを世界に発信するための方策を分野を超えて議論した。日本コンクリート工学会（JCI）や土木学会、日本建築学会など29学舎は東日本大震災あるいは阪神・淡路大震災への対応や今後の検討課題なども紹介した。

午前5件の講演、午後は各学会の報告とパネルディスカッションを行った。午前の講演は来年開催する3つの国際会議の概要紹介と、嘉門雅史京都大学名誉教授が「災害に強い国土と環境」、小松利光九州大学名誉教授が「地球気候変動と防災・減災」について解説した。

続いて前学術会議副会長の春日文子国立医薬品食品衛生研究所安全情報部長が「日本学術会議の防災・Future Earthに関する国際活動」について講演。国連世界防災会議に先立ち、来年1月14～16日に東京大学本郷キャンパス伊藤国際学術研究センター内の伊藤謝恩ホールで「防災・減災に関する国際研究のための東京会議」を開催するが、その副題は「災害リスクの軽減と持続可能な開発を統合した新たな科学技術の構築へ向けて」。フューチャーアースは世界の8機関がライアンスを組んで地球環境問題に取り組みむもので、日本を含む5カ国に国際事務局

「世界の安全保障の増強が必須」であり、そのための喫緊の課題として人材育成をあげた。小松氏は穴あきダムなど環境と調和した治水方式の重要性を指摘した。

まず学術会議会長の大西隆豊橋技術科学大学学長が「国連世界防災会議の意義と役割」を紹介。1994年5月に横浜で第1回が開かれ、翌95年

11月29日のフォーラム「東日本大震災・阪神淡路大震災等の経験を国際的にどう活かすか」では、30学協会による共同声明「過去の大震災から

得られた知見の国際共有（英語）が発表された。来年開催される国際会議等に向けた宣言で、30学協会が今後推進する活動として8項目を盛り

②では東日本大震災や阪神・淡路大震災から学んだ教訓として、とくに事前対策の重要性を強調し、世界の防災に役立てていくとする。事前対策としては、減災措置、緊急時の備え、災害の予測や早期警告のほか、極端に低い確率で起こる巨大災害が実際に発生する可能性への注意喚起などをあげた。

2014年12月15日（月曜日） セメント新聞 4面

「盲目的信頼」を反省

30団体が8項目共同声明

得られた知見の国際共有（英語）が発表された。来年開催される国際会議等に向けた宣言で、30学協会が今後推進する活動として8項目を盛り